LIBRARIES
UNIVERSITY OF WISCONSIN–MADISON

唐太日記 = Karafuto nikki. [vol. 2] 1860

Suzuki Shigehisa
Edo: Harimaya Katsugorō zōhan, 1860

https://digital.library.wisc.edu/

http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

728 State Street | Madison, Wisconsin 53706 | library.wisc.edu

唐太日記

下

表

SUZUKI, SAKEI AND GYOKURAN HASHIMOTO 1860
THE KARAFUTO DIARY, VOL 2. (KARAFUTO NIKKI). TOKYO.

甲寅 唐太日記巻之下

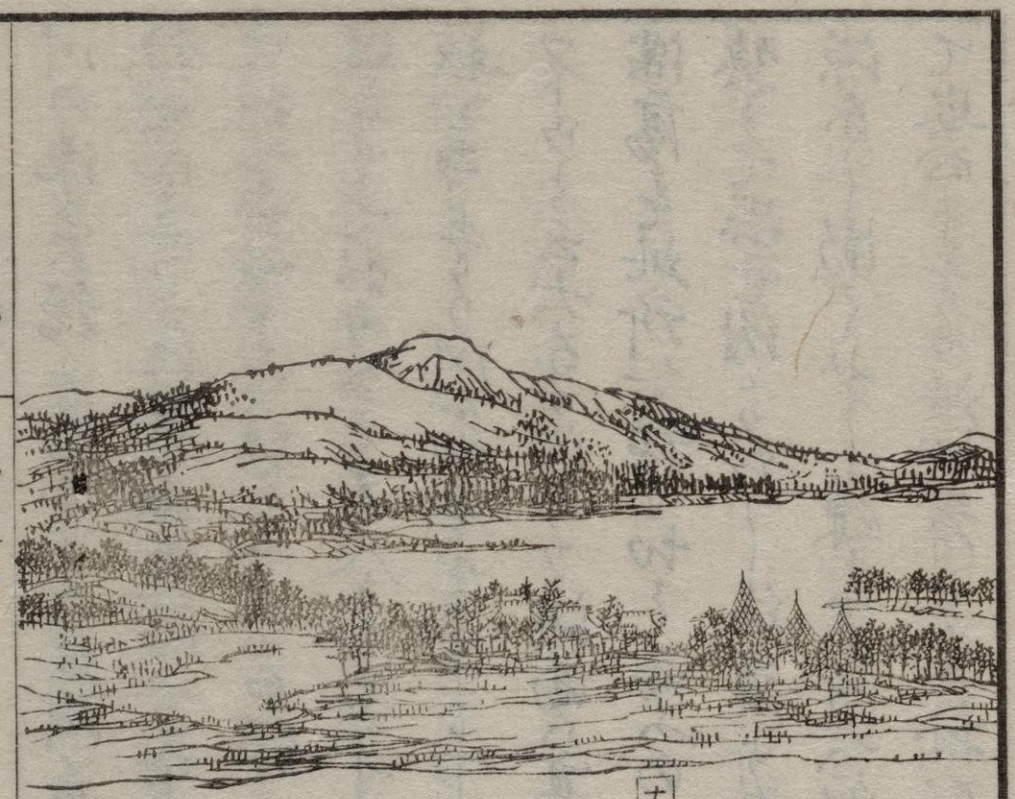
麦氣志郎　松浦弘　評注

廿五日六月昨夜より引續き大雨にて船渡し差支へ
なり早朝より起出旅装して甲斐なれし粮食を支へられて
ひとり船にかくて空しく日を送るの間の心苦しきに
其船を出されハ淀なりと朝を彼ハ牛蒡の粮を入
れ玄米にて粥を焚て食ハ一ヒ少し苦味なれとも巻舟乃
かくして風味雅なるものなり世間にて白鳥と呼ぶ
或ハ玄米を入れ本紙制にて精けなり余も是を

助けく搗きり總て夫家の不自由なること言語に堪へたり
ゆ出んとすれども復物おしを紙洗ひ口噛んとすれるふ鹽なり
俗て金を搗を例さ多ゆ一歳の方こ水を入れて洗ひ
まこ噛まーきりまこ火鉢こ入れ一割目石の凹きり
火をへまこきり

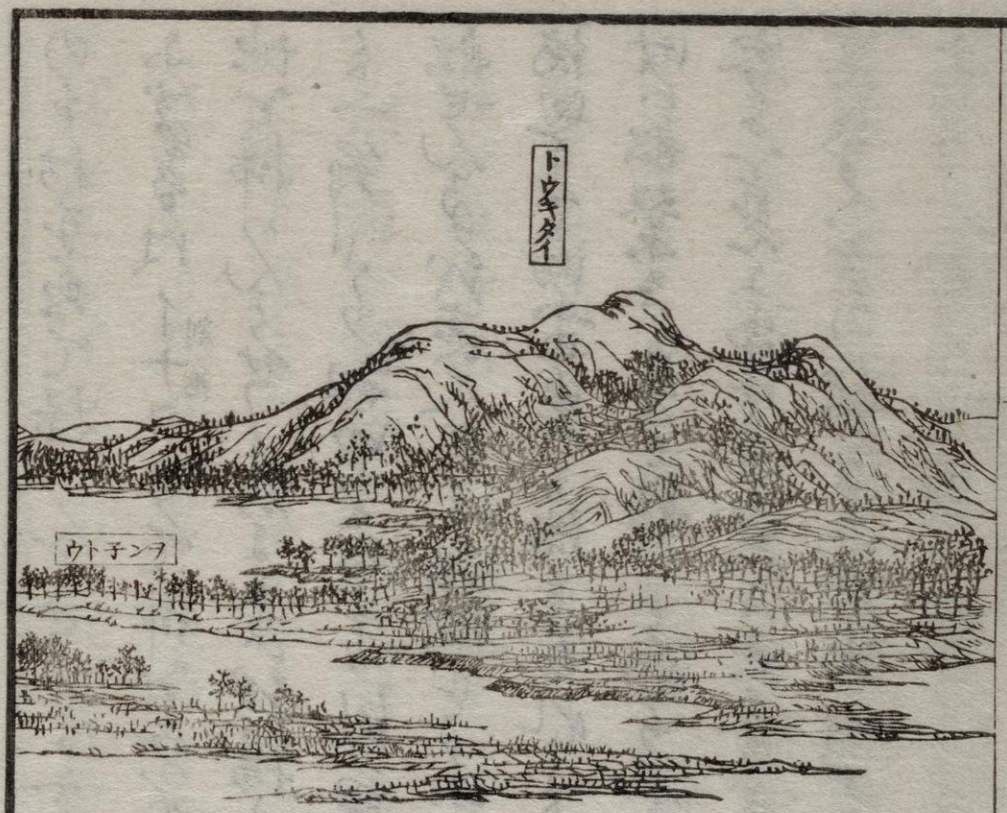
注此石をルウタカの水源よりを出人等鮫漁よ上りを時よ
割り取り垂端方へ配分せるこのこ形り運上屋迄所の出
人等八隨分火鉢位ハ入れこれこ此石を用ゆるの此俗の
風こ形りたり実よ生石を示叢既こ入れこの形り
是種類を作りふ筵の上の様ほこれハ倩よ掛こる博掃(ハタキ)の形

のとりを取て掃うんとせしに女夷数をあけく留めうの後
ふ宮者はイナヲとて神を祭りたるものゝよしなり祢宜て
地を掃うんとせしに有る数枚揚るを忠なりと辛苦の中に
も一郎ゝ叔四郎ゝ風雨も少し穏と成りたるは出
船せんとの紙夷人共ゝ結問とるふ此処より十里余川を下りて
海辺にて向ふの岸に渡るなれども生崎赤壁にて風波荒き
故に船繋ぎ為すと雖しとなり余乃其夜十五日雪を連る海の
容るを見て出たる宮夷人の言のなく風波あらんとして嶮
悪甚しくなりの状なり此海獺夷の千島東沙鄙加に連り
たるよし彼国に賜に遠ゝものなく物凄き体なり此地に



ナイフツ

海青々也
生涯自是無
名利
あしのひと葉を
うけて海に棄
篤



武昌図

川の流れに移る見へ侍りし此河原に鶴白鳥群居る銃鳥を
銃せんとせしに忽飛去れり又夫より小船に乗り先川とより
て行へき所にて行きてよ何ぞしても船寄らぬ時へ引
過ぎて行りなと美人とも也すこし棹へく働て言ふ所る
船と出さり川幅三里余も下り海面に出る左りの方ナエフ
ツトウと云大なる沼あり海面へ高波打寄河水激流して船
漂蕩て此所と棹に切く向ふの岸に出んとすれる赤土の絶
壁にて寄せ附こと能はず海岸より打寄たる結果乱れ棹く室
潮おし働く水し蹴出る所へ船をさし入く皆く能りの始
て安心しさり此切岸に余技附て数度と頼せり

注此崖赤砂交りの土にて壁こしの清水は流れ落る処の
よりて記しめしとも情弐丈程を待ては消失せん生野字
とも何を記しめしやらん石こそ日本の果とも書のひし
ちこ石と一笑也
夫より絶壁の上より漸くたひ上り此所一面の草糸にて松
の枯木多し生外致瑰(ハマナス)蓋(カンザウ)ハ花盛り四五丁行て流れ出る
小流を木の橋りたるを渡し是重宝余りてアイ(地名)と云所の
夷人小屋より宿を
注此地一面の平地東向にして海岸白砂地にて歩行悪
し家の後ろ船山ナイフツのトウキタイより続きたりそれ名

アイウシナイなる故今アイとのゝ云通にてアイを蕁麻の事ウシを多しナイを沢なり此草麻の沢山多きゆゑ此名あるゝと思ふ

夷人名々タシトリと云余今朝ハーと云草の根を入るゝ云米の粥を赤小豆の入る粥を食せしゆゑ此夜腹痛しく大ゆゑ悩みて終宵少しも睡を安るゝ能ずして熊徳ゆゑ侵君より腸ひゝ正氣散なと用ひて曉方ゆゑ少しまゝ安るゝ故ゆゑ苦痛大ゆゑ延引せり

夷家ゆゑ厠もなゝ笠ゆゑ邪ゝ燃火ゆゑ腹痛なゝ子時八日けゝ羅義ゆゑ

廿六日今朝ハ晴さり四時過る頃アイを出さり腹痛して大ま氣力を損し食氣なくれいさ仕度を出さり草原を弐丁して海辺ま出つ又弐三丁してアイベツと云小川を舟にて渡り弐里程にてシルトロ地名夷家を彩出して朝飯を為て今日ハ土風ま〇其志ろ〇〇ハ暑氣を催ふをり夫より小川所〻ふあり又五里餘にてヲタサン地名ありヲタサンベツ船渡しを越て三丁程ありて居村〇乙名ヲマシ子人名の家ま投宿て

注此地も同〻〻東向素浜にてヲタサンベツと云川あり其小岸樞楊柳赤楊等の山際ま家居てヲタヲタ砂〻サンヲ流ま出る儀此川名石砂流ま出るよ也て号ける

此家余程廣く四間より五間も有るべし猟師ありて奥蝦
夷養の書状を通殘し有て玄米を粥をシラヽヨロより殘し置
より也且糧米不給俱よりツリの峠を探り終し即今西浦に赴く
所にて有りて其日鹿を殺して皆〻生肉を食ふ案内者は
きはして白米を粥に煮て食せしめ此海岸ナイフツ川か
シラヽヨロ迄て平曠の沙場にてトヽの木又ハ椴夷松の樹多く
道より深し
廿七日朝より雨降りヲタサンを出小川を越里余にてマ
トマナイ川拾間余夫より壹里半程にてキトウシ夷家武部
此辺を過ぬれハ大霧にて殆人を辨しこゝ〻此海辺より海猫の死

したるこの半身砂に埋まれるなり半八間を切ぬりたり腹の
大サ四尺程のあしキトウシ地名妻家より慧を猛士に海猴の脾を
掛らう鳥狐吹めこ海猴ちこ水豹（アザラシ）の油を貯るし三年経ち大
胡盧のあしこを妻家鰐の切身を猛士より吊（ツル）ーたる六鳥氣慧
雖し武三丁ばてホロナイ川口四五間越てちこ生里半程ちて
ベケレイベツ地名川巾武三間夫よりちこ生里半程小川武ちこ越
てシラヽヲロに着て其入口よシラヽヲロ川巾四五間あり此所山
小屋て村落をあて後の山をイサラ地名ノホリと云イサラを元
たるヲノボリて山のよし此山元生る所あ五六ヵ此いつ下し山の
鳥餌程海中に岩出るり

注此地の地形則東文のゆゑ生村を山の根よりありて少し南を愛らう生前一里の晴礁有て沿形ちとれし故り地名ニラ、ゑ岩のゑりヲロゑ多ゑ儀なり

夷人の常食コロクニ（欵冬）ニロク、（鹹艸）ゑりさ海苔の草の茎を乾貯へ置き水煮して油揚の油を少し入食ゑ惜ハ食せ及玄米を多ゑ粥ゑ煮て粥とゑ油揚の油水鍋の油を少し入て食ゑ腊椀ハゑ帆立貝ゑ鹽ゑ此村人家凡十二三軒ゑあゑ

けゑとゑ運上屋へ稼ゑ行ゑゑ甲斐ゑ義ゑものハ凡人ゑ皆老人ゑ供病者のゑゑゑゑゑ若ゑ女夷ハ運上屋へ行事ゑ家ゑ居ゑ女夷ハ懶惰（ランダ）なゑゑゑ甚ゑくして夜ゑ寝ゑゑゑ出ル朝

起てもを水とをくるもあり煙の端にて烟草を喫するはあり
あり生嫁いまのり女夫ハ男夫り信したるハ食事のを供る
させぬあり小児ハ幼少の時より弓矢を持て走り廻る時是を
能く教へるなり弓紙地を以て矢を張る形なり人を射る事又
子供の用ゆるして此球の凡て男子ハ右小刀先り小刀の武挺を
腰に提女子ハ左挺を提さらはさて男子女子共に十四五才迄ハ
前髪をエキシボと云ふ紙捻なり
注エキシボとハ形る儀を考ふ次只此処武三ヶ所のみあるら
山翹渡りの青玉を三四寸計り三角形に糸にて本孫(鸞)
附是を前髪にかるる玉極美きものなり

武郎國
海岸の賊を捕へたる圖

廿八日朝曇りたれども晴るゝ西の沢より出発して
山の裾を廻り行くエナヲサキ地名シコマナイを越て元壹里半余
てマーヌイ地名よりゆる直養ハ昨日出発して帰宿して余を待
至る件りし我待兼て今朝出立し今の程をマーヌイ川我
海ヶ崎沢なる所と今少しして遠くなる遣ハ有りしまた
前路よりすこし西岡宮松岡角の書状を持る蝦夷人船を
最上暑りと西士ハ一昨夜ウエンコタン角ヲて行て程ヲロツコ
人所住の地まて出てもんとの志あるよし余を集ヶトツソの
嶮を探んため飛夷船を繋ぐ
注マーヌイ右濱形東向たりワアレ岬右シラヽヲロのエナヲ

サキとの間よりして一湾を成し一生所マーヌイヘツと云あり其南岸に家居し後ろハ樹木立生中小一ツの沼あり此沼水の落口なり故に忘れのよし帰路西北へ越るふち此川筋よりあり川の北岸七八丁よりハコタンと云処有て家居堀君の営まれし鹿島の社あり夫人等ゟ願ひの削花(エナホ)を深草中に立る所　皇國の御威稜を耀とも所謂と我

ここに書りけるワーレ岬絶壁奇景あり ホウコタンと云所夫小屋の跡ゟ人を石狩夫より大なる立岩のりクサレ子グと云夫小屋あり此処よりマーヌイより海上九三里とゝふ志れし体ゝひ前処のルシハ子人名

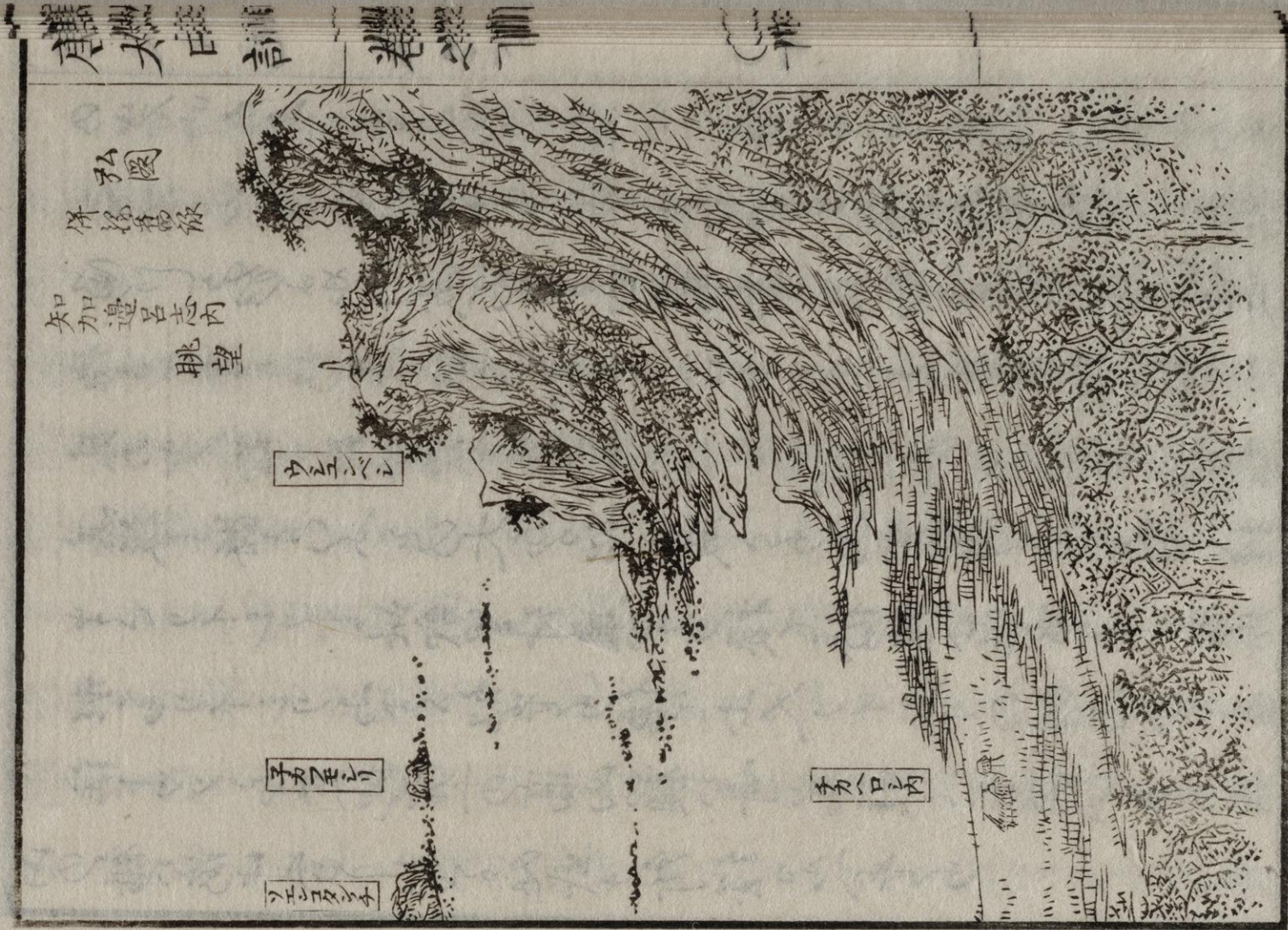
と云夷人と獨言して演説ひして彼は前ふムシリと云離島
鳴あり て酷雷有ること數〳〵五六丁ばかりて一つの岩海中に聳へ
踏ること出るり
注此獨言の夷人は何処とも出るべき所なれども此ところチカベロシ
ナイの者なるべし此地五十計の家屋ありて右ロウシユンヘシ
たりとソエンコタンノチ岬は對峙して一小湾を形ち岸よりの
島あり後ろは樹木立たりて川あり生ひ岸に家有る地
名をチカツプウシナイの沖なる亀し此地鸕鷀(ロジカモメ)鷀はつよ
及ばずエトヒリカ色白かり〳〵来り生餌さ多〳〵の水鳥この離
島に常に群集ち沢山の数は此あ岩ッチカツプ名ちもはて

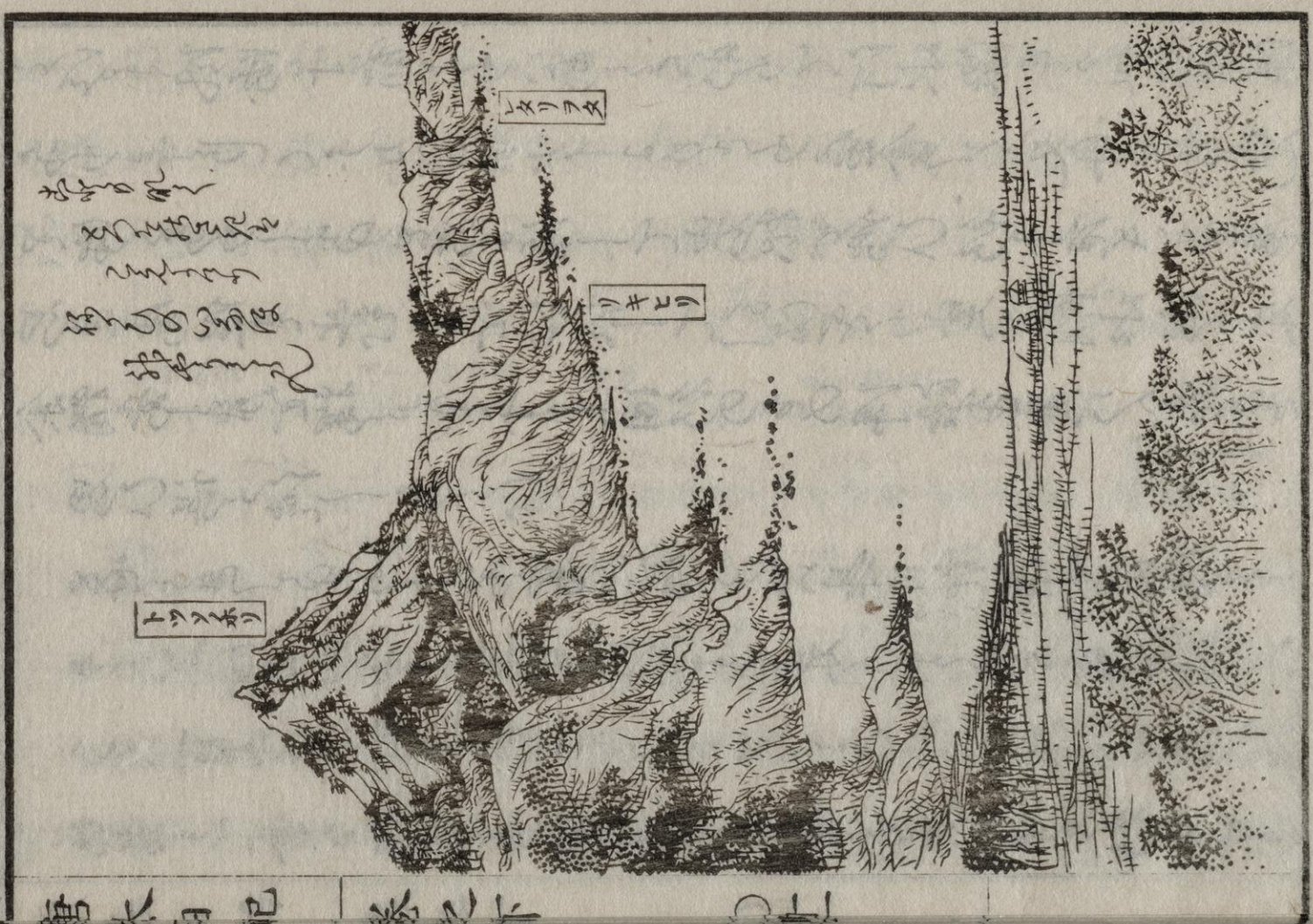
ウシロを見しとゝろ波あり

夫より岩屋平を行ること十間餘にして始めて海の景を望み此所よりテカリマとゝふ奇石あり爰にてトツソの山の側面を見る巔雲を隱して見へず余トツソの麓にいたらんとすれば潮滿て出路を失ひしを以て退かんとせ余押て進む或ハ潮膝の上にて苔ハ又ハ足を辷らす石穴を潛り一岬を過れハ十丁ばかり一岬有て潮こゝに落下余を經てトツソの麓る海岸に出るハ是より絶壁にて潮水深く一歩も進こかゝ〳〵トツソの樹木生茂りこゝ高山にて麓の方こゝ更余の所赤礁にて壹里余も有面白き爰に一條の瀑布あり ニヲイとゝ人ハ呼ぶ

山の横ハ海中へさし出る処ニ所往来人ゆき

注トツソ云東地方一の高山嶺ハ奇嶽簇々と立ひ立く其形ちリイシリに似たり依て土人リイシリの婦山(メコヤマ)ありと云ゆきリイシリ島此武里計奥より按て彼地へ航海せし者ハ其按し跡とつふとの大なる沿ふ成とり山霊著しきゆへ往来の土人必ず此地蝦の字ノホリホと云所へ船を寄せて削花(エナヲ)作りて祭り祈ると彼ハ余チカヘロシナイより先の処ハ船とて通りし事なき何成所なるや審ならず知ることなしと其大岩穴とつ云ハバツテレチシとつひく穴の内き按しと云儀の岩岬なるへしゆきノテカリマと云ふ岩岬のおふあり


内ヶ口
内ヶ子
内ヶ子
内ヶ子



巨岩にて舟を船中より眺望せしに是より先は中々行このきわハ一目ふ〻く明らかにそのトツソこゝハ此辺海の絶るこゝ成のゆゑふ先生此処にて来りもこゝを奥を探らんとせしに日ハ暮ぬ不審也〻くハ是日記清書の時てり思ひ違ひ成しゆゑ

余猶奥を探らんとするふ回行のもの帰路を失うんとせ岩を屬従を止むことを仍て引返せり実ハ潮水満ち来り海こゝのしるの景ハ信して岩根を穿ひ行ハ危きこゝの為ゆゑ辛ひして手カベロシナイよりもの食ふ又舟ハ乗りもん

こゝ風雨午前よりハあらこゝ和して河水激せる和船漂流

ちく潮を打入るゝ度毎に段々潮こみて洋中より出る沖
小浪あるゝきかるゝ船頭の衆人高らゝ小唱へ言ふ事
聞ゝけ共豊吉より聞くせて書附置り

ツカヘル シナヱ　トマリヲロ（地名）　カムイ（神）　ヲロロリ（揉の方）　トシヨフノカムイ（山の神）
マトマイカムイ（松前殿様）　ウ子ノカモイ（同じ所の神様）　子タシユ（有故）　ウ子カムイ（見て居る）　ヱンカラツキ（心もち）　ラムラ
ツケノ。　ヲマナンカ（よろこぶ）　トカンナカムイヲロワノ（それ〳〵神様たち）　子ヤカシニケタ（その上）　ヱンカラ（神様又ては）
ラムラツケノ（達者て）　ホツケタラノマ（暖日時節たち）　マナニ（向へ）　ワキ（暑き）　ピリカ（よろ）　シリンヤツテ（ほ天気）　アフト（雨も）
イシヤマノ（ある）　シリ子クシユ（天気たち）　アシン（新しい）　ノカムイセ（神様）　ヱンホロリ（悪いものあり）　ツキヒリカノ（ちんがらして下さる）

譯ち〳〵尽さるゝと思ふ

七ツ時前よりマースイより戻り今日ゝ迄きこ見へさる様晴よて演

急ぐ余程暑氣を催さるゝ様なれとも綿入の胴衣（トウキ）袴（ハンテン）絆切合羽（カツハ）抔迄
て日向を歩行たるとも汗も出ず異候ゝ所を通る
廿九日朝晴るゝマーヌイ川を船にて渡り行よ三市拾四丁間も有
る西岸樹の木林にて水深て清冷なり左右の屬地元武里余
りてテベア二地名と云処なり今日も亦山路へ分け入るれハ例のアツシ
を着るゝ乃路傍の木ゝ
是迄ハ分けて衣裳せるみ今日ハ着る様子なれ共ぬ
注此所船を岡へ引上置是より陸路を無ゝ故なり信てあの名
あるのナツプヤンゲなるへしと聞伝ふ名
ゝ山路ゝ分くゝ出ず此所ニユニユヤ木も多ラヌ雜木なれとも兼

て使者の通行有へき事なれハ直養夷人を命して草を苅らせ
あとせ取通行をして形ハやとり又板もかけ山を上り又清水
下り表を渡りてやうく山を越すり処にて休む此辺ケヨミウシ地名
と云処に使者の為に仮小屋を掛させられと余知らさりなれハ
寄て見さりき果より先に重宝祖りて夷人弓或人来る
小屋ふ言語不通空義別き書ハ婚して豊吉跡より来りて
彼或人ハ西北迴間の方より来地ハ白米を出せるなり偖てその内
五俵余分て知せりと同行今宵より白米を食とし嘉
ふ又跡より来るものを鱒の改めるものを尾振ひ知れり是
を懶の知て改のこ食らく捨るなりと礼懶を魚の改のこ食

ちく余を捨て直ちに魚を取ることなく俄かに則肉を割て焼て食しかの味甚
美なれば醤ちかきく余所なるものの鮭味噌を添て食しかの味甚
よろし此数は海辺に宿し九月十五日魚不足にして食事なく明夜
潮干一腐を喫せんとす鮮魚なくしかりし今日は不図も獺
のごとく美味を賞めかつ又昨夜玄宋にて醸しる白酒を持
来りて船の上に場して夷人とも赤寄喫ふ〻〻サーブニ
余ら獨立して別に加ふ〻〻さかしく形に茶縫に入く持来れるサーブ
二ヶ一連に五六杯を傾て心地宜氣なり余少し聳て感ふ〻〻
酸の腐りしかくのごとく少し其味のまとも酸きこの蕎麦
小高き処に五六張張て元武里余と思ふ変昨夜直養に宿し

さる小松掛よりて一宿をす

注按ずるに此処元カアマナイとゝ[illegible]

初出人弓背しより山城しの中ハ此宿をすゝと

晦日朝霧りたり去る余て大木の倒るゝ所ゝ体也此木

夷人ゝ本幣をゝて祭る又鉄の矢の根影〳〵刺ゝ立る

チトカンヌシとゝ申ゝ

注此樹数圍の大木形ゝしゝ弐三十年前倒るゝとゝ此辺ゝ

の出人ゝ勢と誠ゝ元ゝ此木の精ゝ向て射ゝ的とゝ

ゝ[illegible]生涯ゝ[illegible]猛獣ゝ逢ゝ射損ずゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

射カンヌシとも尚り刺さる澤のよし形り同名トンナイ
ナヤ越りまたのりまくワーレのみ北シヤリよりと子モロ越
至除所しふあり形り
此前後分水嶺あり夫より武里奈濟攀してクシユンナイの川上
字チベアチとふよ出さり此処よ上川（ウエカハ）他一郎り分岡せ一抗あり余此
所して樹を削ゝせて
東涯探遍又西涯短褐孤節渉峻奇嘗盡瘴嵐多少苦便
知我亦一男兒
此所よ舩弐艘を繋ぎたり是を直養ゝ命して出せ置ゝ
是より棄舩しゝて人夫ゝゝ舩底やゝとすれハ沙よ猪して

傾くこと度々あり土艘の船なれば荷物人迄とも棄捨ゝて六人漂行たりしより迄より厚岸極めて多く二里余ありてクシユンナイに着く

輕風一路棹漁船六月荒陬未脱綿両岸幽禽弄嬌舌韶華

長駐九春川

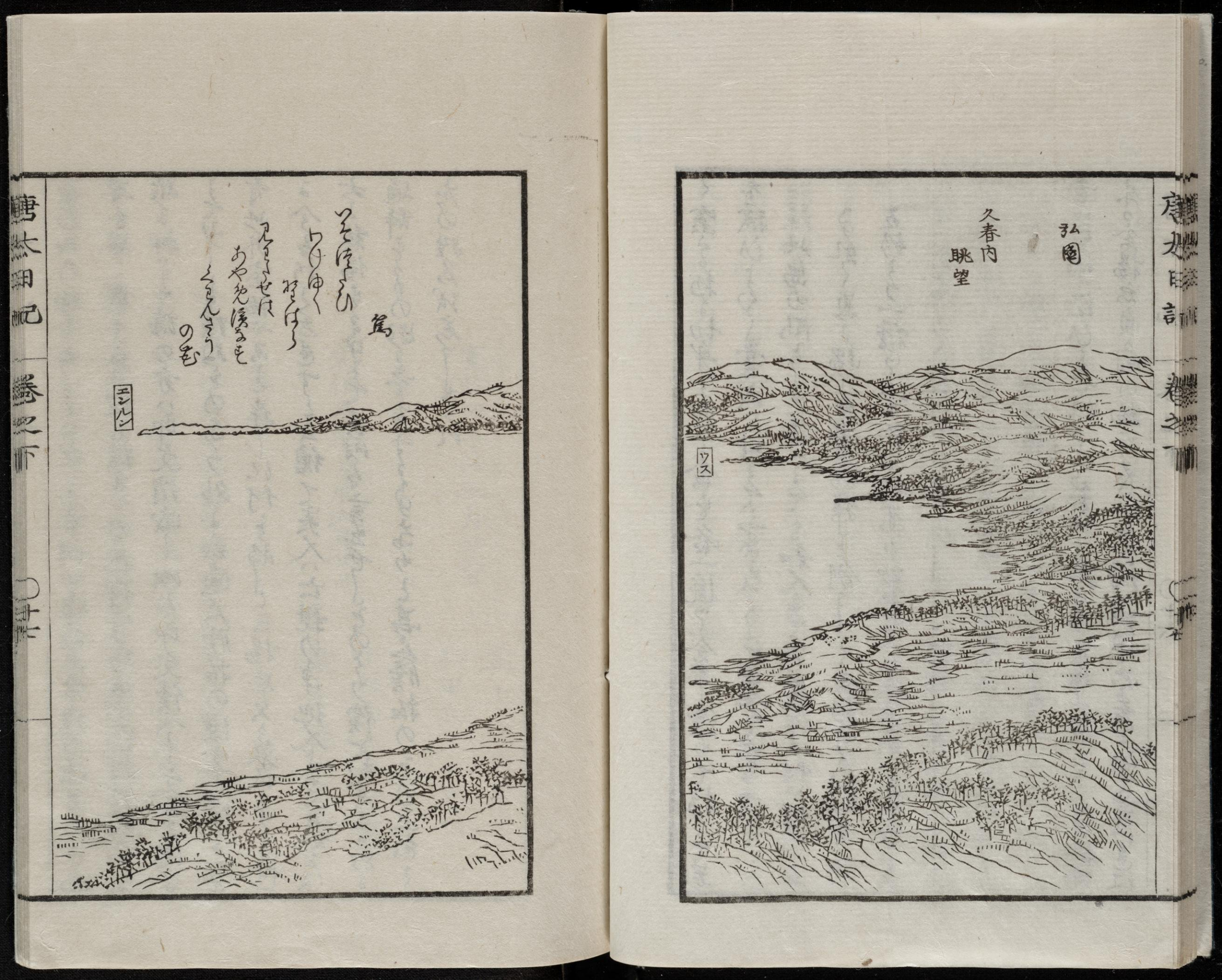
此所夷家四五軒あれとも人家ハ土軒のみ家ハ仮小屋を建たり此番人を馬吉と云上川に從ひて奥地ポロコタン地名迄行まゝ長吾川就作に連る道路ありたりしあるさてクシユンナイ川落口ゟ三拾間もあるライチシカ地名の川落口ゟ是に三倍ゟ馬吉の物語り聞て

注此所西海岸平地ニ一條の川あり先生舟ニて下る此処
人家ハ川の南岸ニあり此処名ヲウスのみしかるエンルカ岬
タクタクヘウシの岬對峙して一小湾をなす故ニ波浪穏ニ
故ニ此名あるクシユンロ浪高ク云説なり
夫より清水ひ武里茶ニてナヨロニ着す南部乙名シトクランケ
人名の家ニ泊て此シトクランケハ楊忠貞ニ仕る者の實孫なり
ニ今日ハ直養ニ饗応して家ニ居ル妻子多ク大鍋ニ
鯨の切肉を入水ニて煮ル夫人共ニ振舞ハるなり蛤の煮物
サアブニ人名ケトウシ人名トメカアイノ人名此せも又此家ニ居る白髪の老
人同く坐ハたウシトクランニ又ハ其の各海扇と本ニて作て黒

く塗る物ゝ切身と盛て食ゝ各一椀ゝ食し終りて持て器を拭ひよく〳〵畳或ハ袖にて拭ハ妻人迎ゆ

注此島の風にて出入にても和人ゆても客ゆる時ハ何品と云ものなく直ゝ端にて巻振舞と例ゝ五杯ゆる村〳〵著名人五杯より一種ゝ食物を持来り饗せり生食器ハ多分帆立貝にて木にて小判形ゝ彫りみゝ物処ゝ耳を付物を是を子マと云ゝ其それにて食ゝ手にて取て本文のごとく〳〵袖にて拭ひ返し洗ゝ云ふ事なり

妻ハ生魚洗ひ出して箱中ゝ入ゝ其時の次ニトクラン人名海来り余楊右貞ゝ時の物ゝ多く一見致度ゝ度ゝ言ゝ言ゝ言ゝ


弘圀
久春内
眺望
ウス
篇
エンルン

要第拓の物を出すより中より章附四通最上常経の濃出あり毫
要分異に載る管理之性之の花押有唐紙半切程の満文の
始より押すり端の方ハ印文消滅し次に印文後へ〳〵文章ハ満字
にて世〳〵伝ぬるものあり外より或通ハ漢拓の漢文と満字一通
有此外宝物やあと尋しに何と称と云揚忠矢の墓のみ碑
より今ら拓とる忘れすと云縦て夫人ハ亡親のみ他人より言ものは
大より愁傷とるるものにて甚附と言出せしものより償をもとるなる
通辞とるるの断と意を面するるものあり甚ハ碑拓のもの上色と
尤の姓名紙を入れ出

慶應義塾図書館

寛政四年壬子五月廿六日

最上德内常短
和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日

小林源之助豊章
最上德内常短

奉

旨賞赫哲來之佐領付勤琿等抵至德楞賞烏林
查得各處各姓哈賚達俱赴前來領賞惟陶姓哈
賚達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文劄
付領取似此情形寔非辦公之道耳聞西數大國

與陶姓人往来是面是以煩勞
貴官如遇陶姓人切尔曉諭令伊明年六月中旬
前来領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
故此特懇

賞烏拉官

佐領付勒琿
雲騎尉凌善
防禦德僧尼

嘉慶廿三年夷則月十五

耳聞

兩散大國原因並未知情吾未

大清大國恩賞烏林亦來者各官員以直驗者不

負自國故此賴一日來若有順使者此處原由一

竝分別稍來覩直須知寔荷

大清大國官員

拜純

此記通常書ならぬ仮名遣ひ多く用ゐる程写の
仕方を写す

清用

此書付の写を以て江戸表へ上申仕り
候間仕方を以て大切に後進に伝事

カラフト島
ナヨロ住夷
ヤエンコロアイノ

此書は最上常雄の自筆なり

注此処間戍向沽浜形ちく超て海岸崩岸多し蛇一條の川あり て其両岸ゟ人家十余軒家居ナイヨロ沢大きしとゝ儀あり

七月朔日 朝晴 ちくウシトクラン人名この家ゟ前の川と小舟にて陸ゟ浜辺ゟ出ゟ是ゟ壱里程赤土の切岸にて潮干ゟ東ゟ所あり風波ゟ通行ゟて難渋のよし 夫ゟ ヒヽヘツ川を越シラヲロゟ ある此処夷小屋あり体も是ゟ此所の土人サンケアイノを番人とし 拾町程 カウマナイサシ 拾町 ゟ ゟてマヲナイ 拾四丁 ゟ ゟてトマリヲロ此処川口巾弐千間程 折間さ ゟ所あり夷家ゟ 是ゟ壱里余 ゟ行て奇巖(キガン)多し 此

より到る此道海中小水弱多し時雖ども極る此辺海中に岩出
たる矢岩ありて路通せず山へ上り又直に下りたり是を坂
鉈一條と称す
注此島々を威嘉求る船鉈に有りと思ふて此時を
多し依て島夷蛮も彼水獺皮を製せし皆と候く敷て
此皆を残遺くるのこるあるに成る船鉈の用心ともや出人
此鉈を取るの和人を信し又敷を時に天氣変り海荒る
よりいひ伝へ
夫よりヲテツコロの岡九十里余を有へし奇なる瀑布(タキ)あり其
水嚴を南りて微塵を砕けて霧となり瀑布の形ちとなるすす

又流水巖より海に苔のさゝを作りて水桶のぬくもりの義像も
流あり　ヲテツコロとゝふ小川を渡りて行所にて後ひ来るサアブ
二人名を女の子の後をとゝり迎よ来りて此辺より海岸浪打際にた
とり絶壁を作りひさ〳〵潮のさゝを通へ八金方濤るとゝあり大鶴
石濱を潜り時越く巖石提耳へ通路絶る所より此処をツウカイ
とゝへるとゝ此海中の岩より海猿一匹横りて卧るとゝ想を続せて
小中りたる拍るとゝ海中へ飛び落て行方知れず
兎角する内日も暮れて雨も降出さりて夫より絶壁を作り
出るふとの上泥濘深く草の丈ケ高くして嶮岨言語絶
あるとゝ断て山上より飛て又沢よりり谷水を越さるに又向ふく

大なる山あり鷲きたれども登り難く草根を取附扶助り漸く
這登り黒暗平を行深草の内樹木の横たわる所を過ぎ陸へ
出ずるに方角を失せしに山道にてサンケアイノ人名と猟夫きたりあるを見
手招きして命じ蹈み通し道を開き漸く海辺に出ずるに
分けすぐる行あり此の数度にして漸く平地に出ずる所窮
て難所にて泥濘深く歩を失すれば忽ち深き淵に陥る
拾るるもの余家にて疲憊極まり進退窮し漸く去て夷
人等ふ引連て岩石を過ぎ降りぬ辛苦して夜二更の頃
有通し海辺へ出ずるに流出るに腰をうけ須臾にして夫分
去る武丁歩く仮小屋に到る

注此所ハ[illegible]ホントマリヤ[illegible]此道ハ[illegible]ヤ女の子ハ[illegible]
セカチ　カナチ等ハ通行いたし[illegible]ハ[illegible]ナヨロ
より元八里半計と思ふる[illegible]ハ[illegible]
此雑説なしかたもあり[illegible]不審なり[illegible]ウカイの
説ハ[illegible]石にて雑木ハ[illegible]
[illegible]トツソの峡[illegible]探[illegible]の心[illegible]何
なしかひしやく心此[illegible]彼[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
此度新[illegible]作[illegible]小屋にて[illegible]園の[illegible]人ハ居[illegible]何[illegible]
[illegible]唯火を焚さし[illegible]跡のこ[illegible]皆[illegible]

ゝせんと強儀を此辺船夷居住せし人の例し果より先バイカラ
サムシ地名と云所にて夷住もあれども置家もなく多く船を陸に
たゝせ今宵は品川まゝにて夜を明ん〳〵とすゝめられども荷を負
ふる夷人とも踏よりも来ることなく〳〵まゝと思へた浜辺に火を焚て
上りふ無性せり湯を沸さんとせ共もなされい面とのく水を汲
入く香も余所に茶碗に水と入焚火〳〵寒を忘れいよ〳〵沸さり
是に砂糖のサー炒〳〵る紙入く香りの明日にて八満果を一袋携へ
出るこの婦夷よりたちまちたまたま是の例し雨に降ることなく
振酒の肴にとり湯を飲よ強てすゝる延とをりて打被ぬ
此日に余所に小巻迄に僕壮卯吉吉サンケアイノ人名のことは

其後ハ皆後まくり終はの疲れまや皆く蓙を被りて打ふしまし
とも余り眠らず能つて火を焚りて濡る衣服乾し又ハ脱て
腹をこ背を煖めたり又サンケアイノ人名ハ少しく横ふまりたと
ちく老人共と寄り居り夜半過る迄より本膳を傳へ蓙
を被りてまた打ふしぬ
二日暁夜より雨降続き昼より余疲の気見えて又火を焚き
たりサンケアイノ人名ハ支度して船を漕へ出ん行くとて暫後
まる人豆の近ひを行くと称り其精悍感ぶべし夫より一睡
おく朝五ツ時目覚て起りて雨も少く強く降る海上ハ波高く
後まる人豆女のことも遅く小船したり老者ハ夫より漕と者て

皆〻食〻うち明ね午飯の後なれいさとて其美あり〻し夫よりて
宴を出て浦辺を見さ里を求りし所四方の方よりり帆数こと
たり余二使君の船なるへしと思へとも問屋き人を称し稍近
つきて見れは又武里余を求りしあり海面縦四五丁余を隔さ
り所にて停望せしに彼船よりも此方を見る拍子あり余如何
とも此人を面なく想ふを命して空砲を数発あり須臾を
為く彼船よりも空砲を発ら出さりよりまて使君の船なる
と思ひ出さり途中過せられ心よかるものこと思へ引返さんと跡
潮せしとも帆を掛て走る船いつ〻遅着へき目的もなし発を角
思ひ煩〻ひく又去里余を求りし所妻人去人出逢さり此の

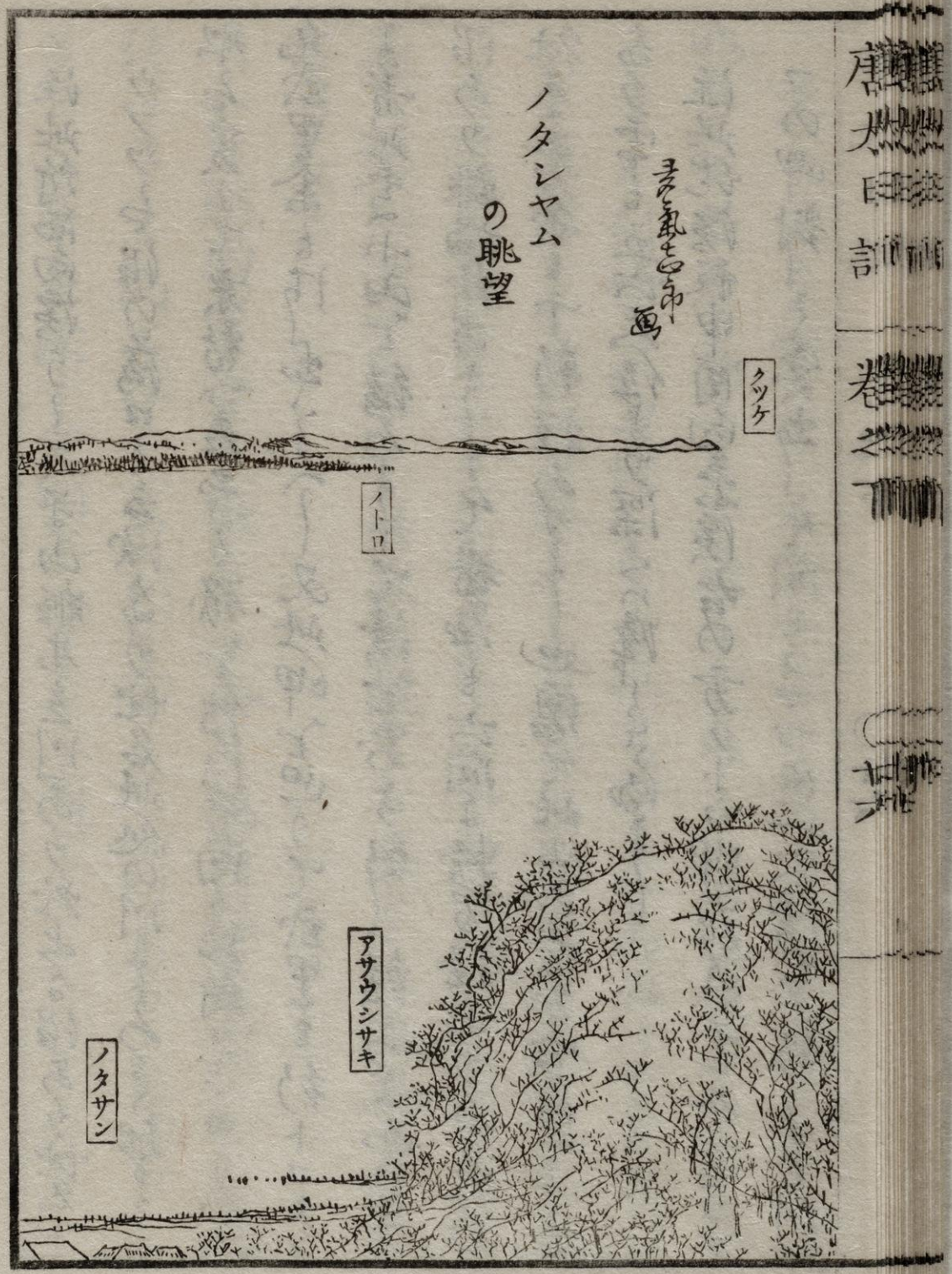
カモイトノチツフ有りやと問ふに頭つきたり夫より小川伐流ヲ
大敷　船
ハイカシに著きぬ
注云ふ此所バイカラサムシかと思ふ本名ハイカルサン
夫を訛りて云ふや船番所一棟あり生憎に小川あり後ろ
嶮しき岩礁地名ハイカルに春のヨサンに流出下ると
云ふ儀此川春雪融すれば水流るゝ故に此名起りしと
思ふ
豊吉ハ蝦夷船に荷物を積余より先に此所に来り居る余に
云かるひ敷ハ昨夜ノタシヤム泊りにて今朝出帆しあひしと聞
て先の船の痕跡を得られ直養ハ昨夜ノタシヤムに泊し故

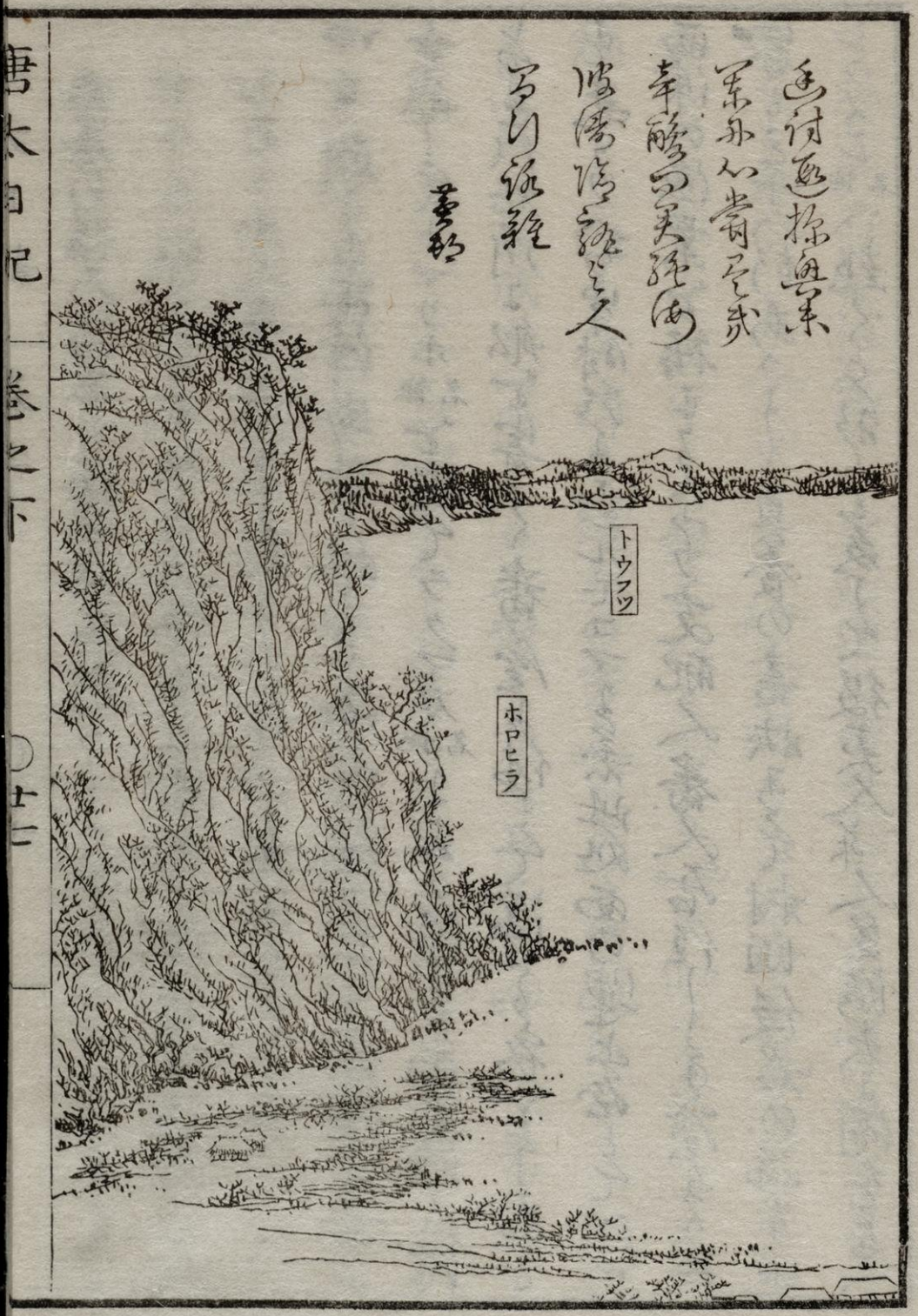
ヤ迄西渡して事情を聞たる様子余僅ヲ五六里の遠
きてノタシヤム地名ヨリ出たりし遠懸いふはこの形余爰ふく
河平の志氏河津平山へ一書を出せり是ハその事情ハ直養渡したん
と知り人の唯実咽の候を探りしるの状迹ヲ爰を出て石
演を常里程過てノタシヤムヨリ来
注此地西向小石演五六丁ヨリ続きたり右ヲアサウシマキ岬
たりヲホロヒラのサキ峨ヲ対ふ繰へ之間一小湾を
ホシ遥南ヨノトロの崎を出ヲ一條の川あり此小岸ヲ
番屋一株妻家五六軒を出よ漁しまり漁猟ヲ本名ヲ
タサンヲ紙東地ヨ国名あるを知いつと乳くノタサンと雷ニ

変ナリシトノヤ

明日ヨリ使者ノ海ヲ渡リ府ヲ変シテ村垣使者ヲエンルモ
コマフシテ引返サレ要地ヨリ出ラレサルヨシヲ知レリ変ハ通行
家ヲ留ルカシテ第川最ヲ出テヨリ知ルノ義ヲ先治セ
ヨトノ余クシユンコタンヲ出テヨリ十四日湯あらせられた
是ヲ喜ビ速ヲ治ヲ地ヲ捷ク歩行ヲ此夜雷鳴あり
雷鳴あり
同三日　朝雨　昼ヨリ歌ヲ今日海夷私ヲ案ヲ知ル風
強ケレトモ海上穏ヲあり武里案シテ小川あり　トウブツヲ
云ハ変ヲ上陸シテ明番ヲ取テ小憩ヲ

注此所西向深うして元来山根朱之川あり此辺沿あり地名ト
ウブツと沿の落口と云波あり地名此処の川よりうく部ろう
船を変して乗替の者出る磯と称して同り此所ノトロと云ふ
凡弐里余を隔て出るへし又此岬を過て弐里を行トコタン
と者此辺小山と後ろよりて湾を為る形後ろ小さき
沿あり離場所のようにて番屋も六間ほど拾間程あり無天乃
社を表出る十軒程あるよし也總て此辺六月中宮居する
あり雪も五六尺位より深くは降らざるよし
注此地溪形中間向表裏右の方ノトロ岬左ヲエンルンモコマ
フの岬對して突出し其間モコマフ迄一大湾を形し其利


ノタシヤムの眺望
クツケ
ノトロ
アサウシサキ
ノタサン


トウフツ
ホロヒラ

番屋の後ろ沼あり後て此名起りしゝ事名ゝトウコタンあり
トウヒ沼コタンヒ知ることゝ傳あり其上ゝ櫓盃（スリバチ）を伏せしゝ如
山あり土人等是をまたリイシリの書山ありと云
四日　朝より雨降出されとも海上穏なり康澤の前ゝ
乗船してトマリホ（地名）を過てラクマカ（地名）まで漕ぎ行より雨降
出ぬ此所ゝ船を寄せ番屋ゝ休こて濡る衣を干あと
夫より八ツ半時ゝエンルモコマヒ此処西の運上屋として設て
西浦の漁業を指とる者ゝ支配人番人居住し多賀ゝ夷
家も二十八軒あるよし直養の書状ゝて村垣侯君の跡を追
シラヌシ（地名）へ越こと彼ゝ後て後夷人并人足雇夷ゝ酒を与へ

て此り所の勞を慰めんとす此運上所の窓より高山の頂を見る
番人を尋ねに妻人トウキタイ地名と云又メノコ山とも云此西にて
高きを山にて洋中より望むはリイシリ地名と似たる故メノコの
稱ありと聞る康澤の後ろの方にて高山あり
注此所南成る向ひノトロ山對ひ尤よしの岬あり是を
号しらエンルレと酒のまとゝ称ウコマフと問と云俗ウコ一
名の暗礁あり二艘の大船を繫く後ろの方ラカイノホリ
山名ホロノホリあると云高山あり此湖より南流ルウタカの河上へ
越るふよ流く運上所義し合て弐拾余株妻家と拾六軒
弁天社あり美し家建さり

五日今日朝より晴るゝ

注此島濱霜降きたるゝ四季の花多く無りて時とし
て十月より一日もあるの形きこの時変あるゝ此モコマフ二四前
後の処にて霜降るゝ考ふ敬て今日時ゝ雨ふ
ゝ無ゝ此辺よりトコタンまて番所数ヶ所あり人畑
を深ゝ開ゝ作て志ゝ〻ゝ多ゝ

是より乗船してヒロチ地名ヲホトマリ地名をこゑ行く行の色も山の
裾にて夫家ゝ見れとも打開き打る処ハ見へてメナントマリ地名と云
所より上陸して直飯をうこ番所にて所見を賦しきる

處々黄菊倚翠微草深古徑沒柴扉挑湾沙岸衝波瘦繞舍

溪流經雨肥窗小唯看山半截江平相映鳥雙飛漁村午靜

閑無事一縷炊煙人未歸

注此地溪形西向小石原より後ろの方不山抵ホモコマ

フより六里半陸行の止宿所なり処なり番屋漁小屋

等あり夫家むりいあり今モコマフより引取て生野も不任

夫より又舟より乘りて七ツ時前トコンホより着て此処も番屋

も多賑あり

注此所西向素濱左りウエンヒラと云山の岬右ヲタライチ

ヒ地名と云一條の砂岬對峙して一小灣を形し川あり其南

岸番屋一株板くらあり夫より夫家生野あり中の方十五里ハ

トヽシマを眺ミ風景いとゝ方形なり

六月晦夜半過より雨降出し暁の頃より晴るゝ前後より乗船を海上数十里ホトヽシマ称号するウシニコロ地名ナヱボ地名マツナシ地名を過て八ツ時過モイレトマリ地名より着を今日強過せし所も昨日の路の如く皆山の裾のごとく平地少しモイレトマリ地名も少し市街さかる処あり此番屋ゝて帆を見を焼の四ツ頃入た

是風景なるもの形ち

注此処亦交の如く山の裾おし市街の処ゝ番屋あり家も

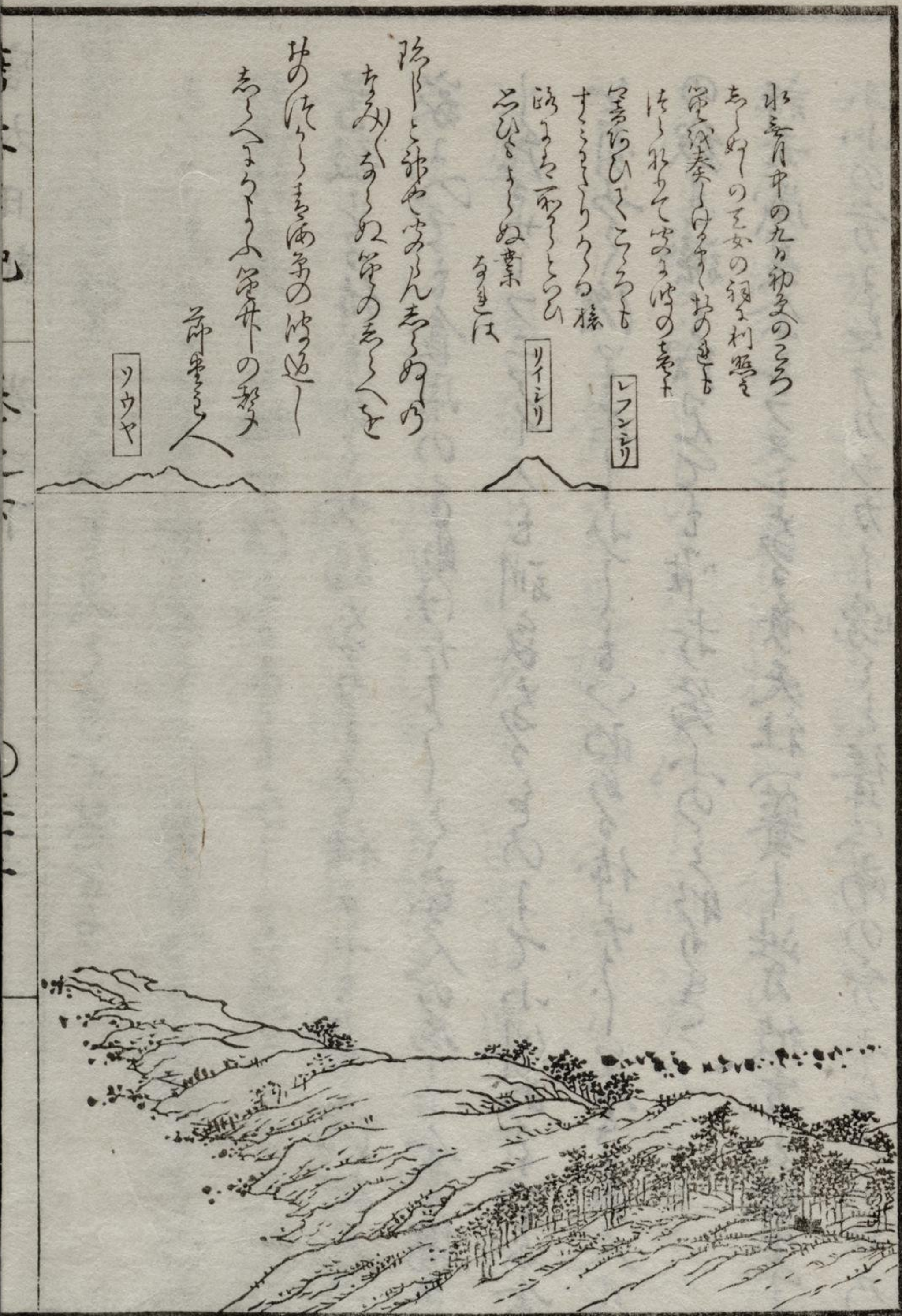
おゝよ上高を漁所西向ゝくトヽシマと對ゝゝり此島を

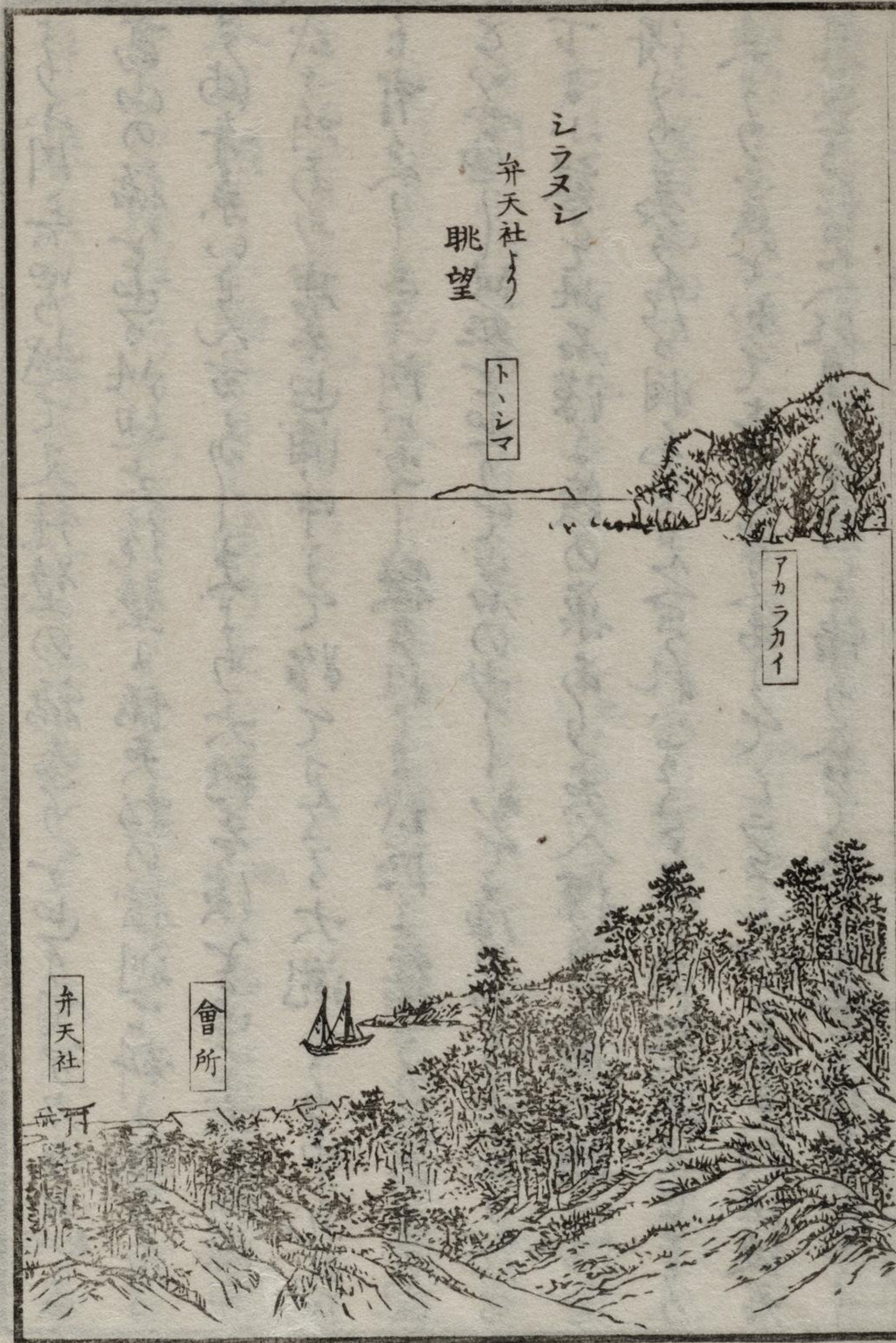
全海積多きより此名ありと生周回七里ゝゝ此処海上も

七里有とかや又当所の地名モイレと云休トマリと船澗と云
係あり トコンホより七里係あり
七日 終日雨今朝い荷物と船積して奉行と陸行しきり
きりモイレトマリトウシヨウニ地名ヤて九拾里余の百姓家
きれもなし中ふと山を遠く歩行きたる処も河辺と小屋
掛もなし小川所こまありて何も岩切もなり何と
いふ処とも小舟しも雨ふり強く降屋根とへきと所も
なし係て宿なしして契約せりシヤウニ地名のみし手前と海所と
隼へて遠見とれい屋根のもうなる岩あり是をウエンナシ地名と
いふウエンと忘きるもチユシと注るもあり此岩ハ岩出て

海少し第六日目船を入るゝ所あるゝ所多く此稱あるゝ所の
裏四ゝ里の所を越て七ツ時過シヨウニ地名に着
注漢船西向下る小石ゝて後ろの方嶮しき高山船出る
左ヲヤエンシユホ地名右ウエンナシ地名非ひ突出るゝを周武里対
の岡一小湾を形ゝる又未の方よりイシリ地名レブンシリ地名を
見風系いとん方ゝし止宿所一株非ゝ夷家二軒あり三五
レトマリより九十里あり
八日朝ゝ小雨今日も漕行をシヨウニ地名を出て直ゝ風の
ゆくゝ絶壁ゆり海岸ゝし物て道巾を少し漕の方切
岸を攀上りて磨き系を四五丁ゝて漕ゝ海ゝ物ゝ是

より小川を四つ越て又絶壁の谷あり と思ひてアカラカ地名と云
高山の谷と思る此辺大絶壁より谷夫れの磯辺に斜に懸りたる
さま奇妙いふ方なし 夫より大軍を演と云て大なる瀑布
武ヶ所あり 唐土浦中にて始て見る大瀑なり中九三間
も有るべし 是ヶ所いかゝ 独られども武所に落る実に奇観
と云べし此処を過て岩のサヽ もて屋のごとくふかりたる
下に小憩 此石落に燕の巣あり 夷人探りて燕の雛三つを
得 羽毛も見えされいかゝ ととの処へのさせ給ふ
夫より宿を求て 是重宝余まりてシラヌシ地名 と云村垣侯君
直養君 行人 侯の幸若を語り合て皆〻悲を記を笑し


ソウヤ
リイシリ
レフンシリ


シラヌシ
弁天社より
眺望
トヽシマ
アカラカイ
弁天社
會所

百姓一人を振夷へも酒を与へて労を慰きり
とへて夷人を悪直小児のごとくして愛とへきことのあり数は
の因行まみしも物乗ひとるとも多し去老ありとて別よ
号数とる体もあくみ弱ありとて侮るふもあること他人乃
家よりても食用の手助けなとしく家人のごし余り嚮と
したるサーフニアイノも訓良あるものとて小川あるとて小余
を頂ふく渡とましみしもいあるる体なし若き夷人た
の戯を強く戒とても唯打笑ふのこと形りき
評去歳夏余ニラヌシ社へ饗し紫彼方と眺望する
ふ小の方ふとアカラカイ嗚と聳へ南の方ふとノトロ乃

岬海中へ突出し一抹の雲と紛うる来の方よりリイシリレ
フンシリ海の中央より青紙流るゝ如く後ろの方雜樹淡霧た
る中より鄰り白きものゝ見ゆるを何と問へば夷人等カリンハニ
のイフイケと答へらり是櫻花なりて此地五六月の頃今
を盛りと開くなりよりて先生の區春評潭の弁天社に
さけのひらかるゝを思ひおもひ日記のそこに書附る
今ゝ思ひの圖を繪しく俳せて出るみ出るしるべく
此卷の壓尾に形ちのあり

一枝紅艶弄嬌柔六月初旬香正稠夷虜何須詢國境此
苓開處是　皇州

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月發兌

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店

播磨屋勝五郎藏版

頭書 蘭溪先生著
圖解

四書略解

附録共
全十一冊

世ふ國字俗語を以て典籍解釋するその数本ひとしなみ
一も童蒙初学ふ為ふ要を得るものなし今まの略解の書ハ
云約ふして能聖賢教へ給ふ和の本旨大要説明ふ至るまと
勝と文を飾て規く物語るふ失なしなれ上陽ふハ本文ふ出字と
注を写ふ遠時ふ宮室器物の類審ふ写と画さて云と以て解し難き
その一目ふ瞭然るしむしかれハ実ふ四来ふ行るるとも天地懸
隔せ一事ふて本学初学ふ童子一段深さ見るバ則ちよく道
義ふ発明するるハ云人ふ及ぶべ達義を試むるりと雖もそ義
と得ることあらざる能し故ふ書の如きハ海内の人童蒙
乃ち多ふ一本と給へらるもんバ何ら能うざるものなり